

アザラシ目（鱧脚目）アシカ科

ニホンアシカ

Zalophus californianus japonicus (Peters, 1866)

島根県：絶滅（EX）

島根県固有評価：－

環境省：絶滅危惧ⅠA類（CR）

写真口絵1

【選定理由】

今は絶滅した可能性が高いニホンアシカが、最後まで生息していたのは島根県であり、竹島を中心に隠岐諸島や島根半島においてその生息記録が多く残されている。本県は、あらゆる意味において、ニホンアシカともっとも関係が深い県である。

【概要】

アシカには、カリフォルニアアシカ、ニホンアシカ、ガラバゴスアシカの3亜種が知られており、本亜種は太平洋東西両海岸に分布するアシカの中の日本近海産亜種とされている（近年独立種とする説が有力）。1950年代初期までは島根県竹島・隠岐諸島・島根半島などでその生息情報があるが、その後確実な生息情報がなく、現在本県では絶滅したと思われる。古くは、本州・四国・九州近海に生息し、島根県の沿岸部の他、津軽・房州・伊豆神津島・相模湾・大阪・淡路島・徳島県・能登七つ島・福岡県などに生息記録が残されている。カリフォル

ニアアシカによく似ているが、メスの毛色が淡色であることや、歯のサイズが大型であることなどの違いが知られている。しかし、その生態等についての詳しい研究が進んでおらず、未解明の部分が少なくない。繁殖期に1頭のオスが数頭から15頭くらいのメスを率いてハーレムをつくり、群で生活することや、5～6月に陸上で1頭の子を産むこと、食物としてはイカ・タコ・魚類を好むことなどが分かっている。また、メスや子供は集団で生活するが、オスは非繁殖期に単独又は複数で回遊し、隠岐諸島などに渡来していた可能性が高い。また、洞窟を好んで休息場としていたことなども最近の調査で判明している。

【県内での生息地域・生息環境】

竹島・隠岐諸島・島根半島などの岩礁や近海に生息していた。

【存続を脅かした原因】

狩猟圧、漁網への絡まり、繁殖場の環境悪化など。

生息地域				山地地域				里地地域				平野地域				海岸地域						
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	林地	草地	砂浜	河口	岩礁
×	×	×	×																			×

ネコ目（食肉目）イヌ科

ニホンオオカミ

Canis lupus hodophilax Temminck, 1839

島根県：絶滅（EX）

島根県固有評価：－

環境省：絶滅（EX）

【選定理由】

江戸時代の諸国産物帳等に産物として記載されているが、現在は生息しない。

【概要】

オオカミ *C. lupus* は全北区に広く分布する種であり、亜種ニホンオオカミ *C. l. hodophilax* は国内では本州・四国・九州に分布した。本種は、オオカミの仲間としては小型で、原始的な形態をしているといわれる。

動物食中心の大型肉食獣であるため、餌動物を狩るための広大な行動圏が必要である。個体群密度はきわめて低く、開発によって生息域が分断されたり餌動物が乱獲された結果、食物や配偶者の確保が困難になったことが絶滅した原因の一つと考えられる。また、伝染病の蔓延とともに家犬との交雑もニホンオオカミ絶滅の原因となった可能性がある。

【県内での生息地域・生息環境】

江戸時代末まで、中国山地脊梁部あたりに生息してい

たらしい。享保元文（1688～1736）刊『諸国産物帳集成第三卷（隠岐・出雲・播磨・備前・備中）』に産物として、文政三年（1820）刊『石見外記』に狼目撃のかなり詳細な聞き書きの記載があるが、実際にニホンオオカミが生息したことを証明するような頭骨や毛皮などの物的な証拠は、県内では見つかっていない。

【存続を脅かした原因】

シカやイノシシなど餌となる大型植食動物の減少や、外来畜犬よりもたらされた伝染病等・家犬との交雑の可能性・生息域の分断狭小化による個体群密度の低下等。

生息地域				山地地域				里地地域				平野地域				海岸地域						
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	林地	草地	砂浜	河口	岩礁
×	×	×		×				×														

ネコ目（食肉目）イタチ科

ニホンカワウソ

Lutra nippon Imaizumi et Yoshiyuki, 1989

島根県：絶滅（EX）

島根県固有評価：－

環境省：絶滅（EX）

【選定理由】

大正時代には県内各地に生息していたらしい。昭和38年の豪雪時に江の川流域で足跡を見たという不確実情報がある。その後の情報はない。

【概要】

日本固有種。本州・四国・九州・対馬に分布。特別天然記念物。本州以南のニホンカワウソを日本本土の固有種とする説や、北海道やユーラシア大陸に産する種と同一であるとする見解がある。河川や湖沼で淡水魚や両生類などを捕食する生活のため、水辺で目撃されることが多かった。海岸に生息するものもいた。おもに、夜行性。1個体が15km前後の範囲内に3～4カ所の泊まり場を持っていて、そこを渡り歩くらしい。水辺だけを移動するのではなく、陸上を別の河川へと移動することもある。本種の食性と広い行動圏から考えると、全国に広く生息していたのだろうが、もともと個体群密度は低かったものと思われる。

県内における最近の目撃情報のほとんどが、ヌートリアの誤認である。

【県内での生息地域・生息環境】

隠岐を除く県内各地河川流域に生息していたらしい。享保元文（1688～1736）刊『諸国産物帳集成第三卷（隠岐・出雲・播磨・備前・備中）』や文政三年（1820）刊『石見外記』に本種の記録がある。江の川には「えんこう淵」という名の淵や、支流の濁川には「獺越（おそごえ）」の地名があり、かつて本種が生息していたことをうかがわせる。

【存続を脅かした原因】

密猟。河岸整備などの河川工事。自然河岸の消失。河川汚濁・汚染。淡水魚の減少。河川周辺の森林破壊。生息域の分断による個体群密度の低下。漁網の設置等。

生息地域				山地地域				里地域				平野地域				海岸地域					
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	林地	草地	砂浜	河口
×	×	×				×	×				×	×				×	×			×	×

ウシ目（偶蹄目）ウシ科

ニホンカモシカ

Capricornis crispus (Temminck, 1845)

島根県：絶滅（EX）

島根県固有評価：－

環境省：－

写真口絵1

【選定理由】

江戸時代の諸国産物帳に記録があり、明治時代の初め頃には、まだ、中国山地に生息していたらしい。現在は生息しない。

【概要】

日本固有種。本州・四国・九州に分布。特別天然記念物。ヤギに比較的近縁の原始的なウシ科動物であり、森林内をおもな生息場所としている。雌雄ともに15cm程度の鋭くとがった角を有し、特定のホームレンジ内で単独生活することが多い。おもに樹木の枝や葉を食べる「木の葉食い」である。

【県内での生息地域・生息環境】

西中国山地あたりでは、「うししか」と呼ばれていた。享保元文（1688～1736）刊の『諸国産物帳集成第三卷（隠岐・出雲・播磨・備前・備中）』によると出雲国産物として「カモシカ」が、また、文政三年（1820）刊の『石見外記』には「走獣部」の項に「羚羊（かもしし）」が

記されている。明治時代初め頃には、まだ、西中国山地脊梁部に残存していたようである（一説では、昭和初期まで生息していたとされる）。森林の伐採と造林は必ずしもニホンカモシカの食糧不足を招くことにならず、これだけでニホンカモシカを絶滅に追いやることはできない。ニホンカモシカは、猟犬や野犬などに追われると断崖の狭い岩棚などに逃げ込む。また、冬期には隠れ場所となる崖の岩棚に、1日中、立ちつくしていることがある。この結果、銃猟者には非常にたやすく撃ち取られてしまうことになる。県内からの絶滅は、おそらく、乱獲によるものと思われる。

【存続を脅かした原因】

乱獲。

生息地域				山地地域				里地域				平野地域				海岸地域					
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	森林	草原	農地	河川	湖沼	林地	草地	砂浜	河口
×	×	×		×																	